

CL寓話一X II

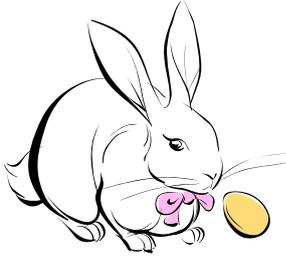
2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第1部

12. Snowball

白兎「スノーボール」



ジェリーはイースターに小さなうさぎをもらいました。ジェリーはだいじそうにそっと兎を手にとって、キルトで作られたベストの暖かいポケットの中に入れました。餌のやり方を教わって、ガレージの横に置いた籠を掃除しました。自分のペットの面倒をよく見て、かわいがりました。兎がジェリーのポケットに入って丸くなって寝るようになり、白い毛がふさふさとした様子から「スノーボール」と名付けられました。

スノーボールがジェリーと暮らすようになって2カ月後に、隣家のジャーマン・シェパード犬が裏庭に押し入って、うさぎの籠を襲いました。スノーボールは覆いの方に走りましたが、安全ではありませんでした。ふわふわした血の毛皮のひと握りの破片が、優しい仲間の残されたすべてでした。

「スノーボールはどうして死ななければならなかったの？」ジェリーは古くからの質問をしました。

「わからないわ」と母親は正直に答えました。

「兎の魂は死んでからどこに行くの？もうスノーボールには逢えないのかな？」

ジェリーは(すでに)、人や動物が死んだ後、魂と呼ぶようなものが生き続けていると聞いていました。たぶん天国でまたスノーボールに逢えるかもしれません。

スノーボールは何も傷ついたりせず、まったく無邪気でした。きっと天国にいますことでしょう。

「さあ、わからないわ」と母親はまた言いました。思わず口から飛びだしそうな言葉で息子を慰めたかったのですが、同時に、正直でありたいとも思いました。「わからないわ」、と悲しみと同情した顔で言いました。

「僕は隣りの犬を憎むよ」純粹に、強く言いました。「同じように他の何かに殺されたらいい」

「ジェリー、あなたは兎の世話をじょうずにしてたでしょ。きっと兎は私たちと一緒に住んでいた間、とても幸せだったに違いないわ」と母親が答えました。

「不公平だよ。友だちのマーレーなんて魚の面倒をぜんぜんみないのに。水槽は汚れで曇っていて。でも犬は魚を殺したりしなかったよ。ぜったい不公平だ」

「ううん、それは違うわ。ジェリーは別のうさぎを欲しいの？」

「ううん、僕はスノーボールが大好きだったから」と下唇を少しだけ前に出して言いました。

「ええ、私もよ。スノーボールが大好きだったわ」と母親も共感しました。

「僕はまだスノーボールが大好きだよ」

「そうね」

「でもフェアじゃない」

「そうね」。

人生は常に公正なわけではありません。時々私たちはできるすべてをしますが、結果は悲惨なこともあります。私たちは病気になり、年とり、いつか死にます。友だちは自分から去って、結婚して、連絡は途絶えます。ジェリーの母親は正直で、優しいです。言葉からもわかります。あなただったらジェリーに何と言うのでしょうか。人生で悪い結果になったら自分に何と言いますか。

(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)